

## 神聖ローマ帝国の始まりについて(その一)

兒 玉 彦 一 郎

健康鍼灸学科

## On the Beginning of the Holy Roman Empire

Hikoichiro KODAMA

### 要 旨

本稿は、神聖ローマ帝国がいつ成立したかを考察したものである。皇帝になるための教皇による戴冠の伝統は、800年のクリスマスではなく、850年のルートヴィヒ II 世の戴冠から始まる。

**キーワード**：教皇、戴冠、カール大帝、ルートヴィヒ II 世、ローマ

### Abstract

In this paper, the beginning of the Holy Roman Empire is discussed. On 25 December 800, Pope Leo III crowned the Frankish king Charlemagne as Emperor in Rome. And in April 850, Pope Leo IV crowned Louis II as Emperor. And thus the custom of the coronation by the Pope began.

**Keywords** : Pope, coronation, Charlemagne, Louis II, Rome

## はじめに

本稿は、神聖ローマ帝国(英語 the Holy Roman Empire、仏語 le Saint Empire roman germanique)の成立がいつなのか、についてのべたものである。

なお、ここでは皇帝位の順番にローマ数字 I, II, III…を用い、王位についてはアラビア数字 1, 2, 3…を用いる。

一般に、日本の教科書などでは962年のオットー大帝の戴冠から神聖ローマ帝国が始まる、とされる。

「神聖ローマ帝国という名称は、『ローマ帝国の復興』と『神聖なる皇帝』という二つの理念が合体して出現し、13世紀中葉以降、西方の皇帝によって正式に使用されたものであり、この名称が、便宜上、962年にさかのぼって使用させているのである。この帝国の領土は、理念的には、教会を特定されることのないキリスト教世界全体であったが、実質的には、西方の皇帝による支配がその時々において実現している地域でしかなかった。」<sup>1)</sup>

一方、神聖ローマ帝国は、800年のカール大帝の戴冠から始まる、という見方もある。

800年のクリスマス、「その日、フランク王国の王シャルルはローマ法王レオ3世から、神聖ローマ帝国皇帝の冠を授けられたのである。後代の歴史学者たちからは『ヨーロッパの誕生』とされることになる、中世史上のビック・イベントであった。」<sup>2)</sup>

また「中世イタリア王国」の欄でもベレンガリオなどにも「神聖ローマ皇帝」が用いられている。<sup>3)</sup>

更に「帝国は、カールが800年にローマにおいて神聖ローマ帝国\*の冠を与えられたことから始まったということは、広く知られている。もっともこの称号をカールが選んだ正確な理由はいまだ明らかではないが。」<sup>4)</sup>とある。この扱い方は、国によってちがうのだろうか。

「大帝は現在のフランス、ドイツ、イタリアの地域を治め、その後、神聖ローマ帝国の基礎を構築したという意味において、歴史上で重要な役割を果たしたからである。とくに大帝は、800年にローマ教皇レオ三世から戴冠されたので、実質的に初代の神聖ローマ皇帝と称されることもある。」<sup>5)</sup>ドイツ史ではないが、ドイツ文化の専門家でも「実質的に」認めているように見える。

そもそもカール大帝について「この皇帝は、ドイツ人であったのか、それともフランス人であったのか—このことをドイツ人は12世紀以降常に問い続けなければならなかったし、実に1935年になってもまだ議論は繰り返されていた。」<sup>6)</sup>ドイツを中心としてドイツ的なものとして神聖ローマ帝国をとらえれば、オットー大帝から神聖ローマ帝国が始まる、と言えるのかもしれない。

### 1. 「帝冠」の呼称。

「カールの戴冠までは、教会による国王の塗油はあっ

たにせよ、戴冠はなかった。…東ローマの場合と順序がまったく逆であり、法王の宣言が戴冠儀式の最重要要素になっており、法王が皇帝をつくるというかたちをとっているわけである。これはおよそローマ帝国の習慣にない革命的な行為だったことになる。…クリスマスのミサ聖祭は、いつもなら、サンタ・マリア・マジョーレ寺でおこなわれる例であるのに、それを聖ペテロ寺にかえたのは、この重要な儀式のためなのである。」<sup>7)</sup>

「神聖ローマ帝国はカール大帝の国の後継国家であった。このことを裏書きするのは、おそらくオットー大帝の戴冠時に用いられ、歴代の皇帝が戴冠式などの重要な儀礼の際に用い続けていた皇帝冠が『カール大帝の皇帝冠』と称されていたことである」<sup>8)</sup>。

その「帝国冠は、オットー諸帝国時代、しかし遅くとも初期ザリアー時代には、君主制の最も高貴な象徴となった。それは王冠であり、しかも帝冠であった。その成立時期は学会で議論の対象になっている。たぶん962年のオットー大帝の皇帝戴冠式用にそれは作られ、続く時代のあいだに、さらに手を加えて仕上げられたのだろう。」<sup>9)</sup>

「支配権標はカロリング時代にすでに、王位継承の規定で重要な役割を演じていた。ルイ敬虔帝は死の直前に、長男ロートル一世に帝国権標である帝笏、帝冠を送達して後継者に指名した。877年シャルル禿頭王も、879年ルイ二世吃音王も同様におこなった。国王コンラート一世によるザクセン大公の指定もまた、王位の権標の送達によっておこなわれた。

ドイツ王国において国王もしくは皇帝の支配権標(insignia regalia, insignia imperialia)は、帝国に対する支配を、そして遂には帝国そのものを象徴する特別な力を獲得した。…最も大切な帝国権標は、聖槍、帝冠、帝剣、帝国宝珠、帝笏であるが、その全体を王室財宝を形成し、支配者から支配者へと引き連れた。…その引渡は王位の放棄を意味した。」<sup>10)</sup>

「戴冠式には、真正な帝国権標の使用が望ましかったが、それは不可欠ではなかった。1423年ジギスメントが帝国宝物の帝国都市ニュルンベルクへの常時保管を定め、ようやく帝国権標は新たに選出されたどの国王の戴冠式にも用いられるようになった。」<sup>11)</sup>

「ハインリヒ一世は926年にブルグント王ルードルフ二世から、とりわけ象徴性豊かな支配の印である聖槍を機手に入れた。」<sup>12)</sup>

「帝国十字架は、銘によると、帝国冠につるを付けさせた皇帝コンラート二世によって寄進された。」<sup>13)</sup>

### ●ニュルンベルク

11世紀中頃、ハインリヒ III 世によりニュルンベルクが建設された。「ニュルンベルクは司教座都市ではなく、ただその町の領地バンベルクの司教区の宗教的な祭典を祝うだけであった。ところが13世紀になってA・ボル

ストによれば、セバルドは影から現れ、自由と都市の発展の象徴となりはじめ、1219年にフリードヒリ二世から特権を受けた。都市当局はセバルドを祭るために大きい教会堂を建て、それが1273年に神聖化された。以来、聖セバルドの祝日、8月19日は毎年、盛大に祝賀され、またその祭日は1256年以降は公式なものになる。」<sup>14)</sup>

## 2. I世から順番に続いている「帝位」の呼称。

ヨーロッパ史の王朝では、同じ名前が続くので、区別するために添え名を加えるか、数字付きで「～世」というように呼ぶ。

「序数を用いての呼称(「～世」)がよく使われるようになるのは9世紀末以降であり、メロヴィング朝の国王たちはもとより、カロリング朝の国王たちも「～世」と称してはいない。多くの場合、後代の人びとがつけ加えたものである。」<sup>15)</sup>

ここで、ローマ数字を用いると、カール大帝(748[42, 47]～814)は、「皇帝カールI世」となる。「皇帝カールII世」は、カール大帝の孫で、敬虔帝の末っ子が875年のクリスマス、ローマで聖別した皇帝カールII世である。彼は西フランク王「シャルル禿頭王 Charles le Chauve」(823～77)でもある。「皇帝カールIII世」は、カール大帝の曾孫で、ルートヴィヒ2世ドイツ人王の末っ子が881年に皇帝カールIII世となった。彼は12世紀からドイツ語でder Dickeと呼ばれ、東・西フランク王「カール肥満王 Karl der Dicke, 仏語で Charles le Fat」(839～88)である。

それでは、「皇帝カールIV世」は誰か？

「皇帝カールIV世」は「神聖ローマ帝国」の皇帝で、プラハ生まれのルクセンブルク家のボヘミア王カレル1世(1316～78)である。そして「皇帝カールV世」は、ハプスブルク家のスペイン王カルロス1世(1500～58)で、その後は、ハプスブルク家のマリア・テレジア(Maria Theresia 1714～80)の父カールVI世(1685～1740)、そしてマリア・テレジアの夫に立ち上がったヴィテルスバッハ家のカールVII世アルブレヒト(1697～1745)となる。「神聖ローマ帝国」の皇帝で「カール」と呼ばれる皇帝は7回で終わった。

このローマ数字をさかのぼっていくと、「カールI世」、すなわちカール大帝は「神聖ローマ帝国」の皇帝と考えることもできることになる。

また「皇帝ルートヴィヒ」も同様で、ルートヴィヒI世敬虔帝(778～840)から、皇帝ロータルI世の息子ルートヴィヒII世(822[825]～75)、ブルグントから皇帝となるルートヴィヒIII世(881[82]～928)、ヴィッテルスバッハ家のルートヴィヒIV世(1282～1347)となる。

なおフランスでは、「【注】(1)王や大貴族が同名の場合に番号による順序付けが始まるのは、聖王ルイの世紀といわれる13世紀になってからでしかない。フランス

王に番号を付けた最初は、聖王ルイときわめて親密な人物であるヴァンサン・ド・ボーヴェである。またサン＝ドニでは、プリマ[サン＝ドニ修道士]が聖ルイの求めに応じてフランス歴代王の年代記を著わす。」<sup>16)</sup>

「フランス王国」の始まりを敬虔帝崩御またはヴェルダン条約に求めれば、最初の「フランス王」は禿頭王(西フランク王在位840[843]～77)となり、彼がシャルル1世となる。彼は「皇帝」としてはシャルルII世、つまり「皇帝カールII世」(皇帝在位875～77)である。同様にシャルル2世は肥満王(東フランク王在位882～87; 西フランク王在位885～88)で、皇帝としては「皇帝カールIII世」(皇帝在位881～88)。シャルル3世は単純王(西フランク王在位893～923)となる。<sup>17)</sup>

ヴェルダン条約について「この場合最も注意すべきことは、この条約により三つの国ができたのではなく、三人の兄弟が一つの大帝国を分有し、そのなかで長兄が優位を得たということである。」<sup>18)</sup>

また「かつてロテール二世の国家を『ロートリンゲン』と呼ぶように、12・13世紀のドイツ人はフランスを指して『シャルルの王国』と呼ぶのである。」<sup>19)</sup>この「シャルル」は禿頭王から始まる王国であろう。

## 3. 神聖ローマ帝国の名称の成立はいつなのか。

「教科書的な概説書では、よく、962年のローマにおけるオットー一世の皇帝戴冠をもって、『ここに神聖ローマ帝国が誕生した』といった記述をしているものが多い。しかし、このときにおこったのは、それまで約40年にわたって空位であった皇帝の位に、ザクセン出身の東フランク王がついたということだけであって、新しい国家の誕生でもなければ、いわんや『神聖ローマ』という名の帝国の誕生ではなかった。オットー一世の獲得した皇帝権は、いうまでもなく、カール大帝の800年の戴冠に始まり、フランク時代をつうじてカロリング家のフランク諸王によってになわれてきた。」<sup>20)</sup>

「神聖ローマ帝国」について、「ところがこの名称はそれに値する実体をもっていただけではない。中世の国王たちは皆カロリングのカール大帝の後継者であるという意識を持っていた。」<sup>21)</sup>

そして「カール大帝の後継者らはその後、たいしてはただ帝国(Imperium)という簡単な名称を使用するのみであった。もっともカロリング帝国が、皇帝アウグストゥスにより創設されたローマ帝国を意味することは、当時の人々にとって疑いもない事実であった。」<sup>22)</sup>

つまり「オットー一世の皇帝戴冠によって再興された西方帝国は、『帝国』(Imperium)という学術概念を用いてあらわされる。歴史学ではこの概念は、史料上の用法に従って、とりわけオットー一世が戴冠した962年からシュタウフェン朝支配の終焉である1254年までの数世紀に対して使われる。」<sup>23)</sup>

一方「かつてアルクウィン(730頃～804)は、カール大帝の帝国を『キリスト教帝国 imperium Christianum』と呼」<sup>24)</sup>んだ。

『ローマ帝国』(Imperium Romanum)は、しかし同時にまた『キリスト教帝国』(Imperium Christianum)ともみなされ、皇帝と教皇が共同で統率するものとみなされた。…シルヴェステル二世(在位 999～1003)として聖ペトロの座に登位したとき、帝権(Imperium)と教権(Sacerdotium)の調和的結合の、このような理想的状態が現実には達成された。<sup>25)</sup>

「コンラート二世の時代以降『ローマ帝国』(Imperium Romanum)の名称が広く普及し、帝国は三王国を結び合わせる鏡と理解された。<sup>26)</sup>

皇帝フリードリヒ I 世バルバロッサ(在位 1152～90; 皇帝戴冠 1155)が 1157 年 3 月末「神聖帝国(ラテン語で Sacrum Imperium)」を用いていた。

そして「すでにシュタウフェン朝時代や大空位時代において帝国理念の神聖化が行われ『神聖ローマ帝国』(Sacrum Romanum Imperium, Heiliges Römisches Reich)という名称が形成された。<sup>27)</sup>

そもそも「神聖ローマ帝国(独語 das Heilige Römische Reich, ラテン語 Sacrum Imperium Romanorum)」という名称は、13 世紀の中頃、1254 年に初めて用いられた。

そして「1477 年にはじめて帝国とドイツ国民が互いに結合され (heiliges reich tutzscher nation)、1486 年のフランクフルトの帝国ラント平和令でドイツ国民の全ローマ帝国(das ganz Ronische reiche teutzscher nation)とよばれ、さらに 1512 年について(Heiliges Römisches Reich Teutschter Nation)という、五つの単語からなる帝国の名称が現れた。しかしながらその称号は、そのような完全な形では、16 世紀後半までは帝国の他の名称と並んで用いられたにすぎない。そもそも公式の帝国名称といえる限りでは、13 世紀から 1806 年の帝国崩壊まで、神聖ローマ帝国(Sacrum Romanum Imperium、ドイツ語訳では Heiliges Römisches Reich)が用いられたといえよう。<sup>28)</sup>

すなわちオットー大帝の時代には「神聖ローマ帝国」という呼称はなかった。それを後の人たちが時間を遡らせて用いているのである。そういう訳で、カール大帝まで遡らせて用いることも可能とではないのか。

#### 4. 皇帝となる要件とは何か。

一般には皇帝になるためには、ローマ教皇による聖別が必要である、と考えられている。それも、ローマで。そしてサン・ピエトロ聖堂<sup>29)</sup>で。

「西ヨーロッパ皇帝権が東ローマ・ビザンツ皇帝権から区別される特徴は、長短はあれ空位の期間がくりかえされた事実である。なぜならば、ドイツ王は中世後期まで選挙後にローマに赴かねばならず、教皇による皇帝戴

冠によって初めて、皇帝の称号使用がゆるされたからである。<sup>30)</sup>

「8 世紀と 10 世紀におけるヨーロッパで樹立された新しい王朝—カロリング朝、オットー朝、カペー朝、等—はその正当化を求めてキリスト教会に頼ろうとした。だからこそこれらの王朝は、ビザンティウムで生き残ったキリスト教的帝国の伝統を回復し、西ゴート王の戴冠のためにスペインで定められたような塗油と戴冠の儀式で完成させた。そのとき受ける列聖の儀式で、王は世俗的貴族から離れて『仲介者』 oratores 側へ移り、一種の『外部司教』となり、かれらの行動はキリスト教会から指導と教化を受けるようになる。ヨーロッパ大陸でもイギリスでも、国王の機能をめぐって明らかに旧約聖書の影響を受けた『正統な王』 rex justus のイデオロギー全体が発達した。<sup>31)</sup>

つまり「王や皇帝は、中世を通じてずっと、聖職者ではないまでも、少なくとも宗教的に聖別した存在としてみずからを認めさせようと努力を続けていく。そのために採られた手段が《聖別》(sacre)と《戴冠》(couronnement)で、これらは、王ないし皇帝を『主によって聖油を注がれし者』、『神より冠を授けられし王』たらしめる宗教的儀式であった。

《聖別》は一つの秘蹟(sacrement)で、この儀式のあと、歓呼の雄叫びが発せられた。この《歓呼》(laudes regiae)も、エルネスト・カントロヴィッチが述べているように、新しい君主を天上のヒエラルヒーのなかに受け入れる教会の認知という意味を持っていた。聖職者たちによる連呼に続いて行われたこの《歓呼》は、二つの世界の均衡(というより結合)を表しており、『天上と教会および国家の宇宙的調和』を宣言するものであった。

《聖別》が叙品の一つであったことは、1046 年、ハインリヒ三世がリエージュの司教ワゾンに『余もまた万人に命令する権利を得た。聖なる油を注がれたればなり』と宣言していることに窺われる。また 1084 年、法王グレゴリウス七世との抗争のさなか、ハインリヒ四世の臣下、ギィ・ドナスナブリュックは『王は一般の俗人とは区別されるべきである。なぜなら、聖油を注がれることによって、聖職者の職務を分かち持っているからである』と述べている。<sup>32)</sup>

このローマ教皇の塗油(仏語 onction)による聖別[成聖]式(仏語 sacre)と戴冠(仏語 couronnement)は、1530 年 2 月 24 日のポローニャのサン・ペトローニオ(San Petronio)教会におけるカール V 世の戴冠まで続くことになる。

なお、フランス語で sacre, consécration、ドイツ語で Weihe、英語で consecration は、司教の場合は「叙階式」を意味する。教会などの献堂(式)の意味もある。

なお塗油(英語 anointing)での油は、神の聖なる力と恵みを注ぐシンボルとされる。[聖書 サム上 10・1]。

「11 世紀前半に作成されたと推定される『ザーリアー皇帝戴冠式書』や他の定式書に従うならば、次のような

経過であったと想像できる。

いわゆる『戴冠式』は、教会のミサの一部として挙行され、正確には『聖別』と戴冠の二部からなる。<sup>33)</sup>

#### 4.1. 教皇による皇帝の聖別はいつ成立したのか。

800年12月25日ローマでのカール大帝の場合、戴冠(独語 Krönung、仏語 couronnement)と歓呼礼(独語 Akklamation、仏語 acclamation)はあったが、塗油(独語 Salbung、仏語 onction、ラテン語 unctio)に関しては、なかったかもしれない。<sup>34)</sup>

なお「国制史では歓呼礼(独語 Akklamation、Vollbort)という言葉で、国王選挙に対する法形式に従う人民の同意を意味する。

歓呼は、中世の国王選挙の確固たる要素であり続けた。人民選挙から諸侯選挙への移行によって、確かにその政治的意義は失われたが、法的意義は失われなかった。<sup>35)</sup>「フランク人の王が行った最初の戴冠は、とりもなおさずシャルルマーニュの皇帝としての戴冠であった。12月25日に使用された冠がサン・ピエトロ寺院宝物庫蔵の数ある冠の一つで、『ローマ教皇伝』の作者が《非常に貴重なもの》と記したことを記憶にとどめておくだけで十分である。はるかに重要なのは、戴冠に伴って教皇の祈りが唱えられたことである。…いずれにせよレオ三世は、声高々と祝別の文言を発した。…重要なのは《祝別》であるにせよ《聖別》であるにせよ、同時代人からはシャルルマーニュが聖なる職務つまり聖職位階に入ったし、それ故彼が叙階されたしと理解された点にある。聖別はこの時期にはまだ必ずしも叙階式を意味するものではなかった。ローマは当時、司教叙階式を採用しておらず、ビザンツの儀式には皇帝叙階式なるものは存在していなかった。…『ローマ教皇伝』によれば、歓呼の声は三回あがり、《加護を求める祈りが何人もの聖人に捧げられた。》このことから、『頌詩』の加護を求める祈りが歓呼につづいたと考えられる。この場面では不明な点が多い。ビザンツに生きていたローマ皇帝即位式では、歓呼は皇帝を作り出す意味を持っていた。<sup>36)</sup>

K.J.ベントによれば「当時、教皇座はビザンツの即位式を単に模倣するだけでは満足せず、カールの皇帝戴冠のための新しい儀式を模索したが、そのなかで新しい儀式の骨格として利用しようとしたのが、ローマの司教叙階式だったというのである。典礼という枠組みの中で行われた皇帝戴冠式のなかで、もっとも重要な行為は、ローマ教皇レオによる加冠であった。<sup>37)</sup>

そして「カール大帝の戴冠式では、ローマ市民の歓呼の声が法的に重要な決定的な役割を演じていたが、すでに9世紀後半には、ローマで教皇によって行われる塗油礼と戴冠式が皇帝の即位にとって最も重要な行為であるとみなされるようになった。戴冠式は教皇の立場では本質的な意味をもっていたが、皇帝の立場では儀式としての意味をもつにすぎなかった。教皇は帝冠授与者として

の役目から、帝冠の処分権を、少なくとも帝位候補者の認可権を主張した。<sup>38)</sup>

カール大帝は、814年1月28日に亡くなる。

813年9月、ルートヴィヒ[ルイ]II世は、共治帝(Mitkaiser)となった。

ここでは、Mitkaiserの訳に共治帝を用いる。なお「共治王権という表現は、近代的な学術用語である。共治国王は、単なる国王の称号のみを名乗った。<sup>39)</sup>

「次の813年の皇帝戴冠式はローマではなく、アーヘンで行われた。教皇は同席しなかった。聖職者が関わったかどうかはわからない。アインハルトの報告によると、カールはフランク王国の全有力者を集め、クーンクトールム・コーンシリオ、つまり厳かな全員の決議により、息子のルートヴィヒ[敬虔王]を全王国の共同統治者とし、皇帝位の後継者とした。彼に王冠をかぶせ、インペラートルにしてアウグストゥス、と呼ぶように命じた。これでもってカールは、明らかに、フランクの有力者の前で皇帝戴冠式に自らの手で自分の趣味にあった形式を、そして同時にもちろん特別な性格も与えようとしたのである。つまり皇帝権威の所有者への権利的付与行為としての戴冠式そのものが、これ以降もそのようにして行うべきものとされた。そういう形式ならば、800年のローマでのその戴冠もカールにとって受け入れられただろう。教皇が戴冠するのではなく、こういう際に皇帝位そのものが、いわば自分の全権で継続すべきだ、というのであった。<sup>40)</sup>

「父カール大帝の死後、814年に単独統治者となったルイ敬虔帝は、皇帝問題に関して父よりも徹底していた。彼はフランクとランゴバルトの王号を捨て、ただ単に『皇帝』(imperator augustus)と称した。皇帝のタイトルがカロリング朝の王国全体に関する支配を表現していると考えたのである。<sup>41)</sup>

「816年、ローマでは教皇レオ3世が亡くなり、皇帝は次期教皇の選出にはなんら関与せず、教皇にはシュテファヌス4世が選ばれた。新教皇は皇帝に忠誠を誓うため北上し、816年10月、ランスで再度皇帝に戴冠した。そのとき持参したのが皇帝コンスタンティヌス大帝がかぶっていた冠であった。シュテファヌスは翌年1月ローマへ帰ったが、三ヵ月たないうちに亡くなり、パスカーリス一世が後継した。<sup>42)</sup>

ルートヴィヒ[ルイ]II世敬虔帝と皇后エルメンガルド[イルミンガルト]がランスの聖マリア教会でローマ教皇により聖別を受ける。ルートヴィヒ[ルイ]II世にとっては二度目の戴冠式であった。この時、教皇により塗油(独語 Kaisersalbung)と戴冠(独語 Kaiserkrönung)がなされ、皇后エルメンガルド[イルミンガルト]も教皇により黄金の冠による戴冠がなされたという。

#### ●ランス(Reims)

ランスにおけるクロヴィスの改宗を意識して、ルートヴィヒ[ルイ]II世敬虔帝はランスでの皇帝の聖別を執

り行ったといわれる。

496年、クローヴィスは3000人以上の部下とともに聖レミから洗礼を受けて改宗した、とされる。この聖レミを記念するのがランスの司教座聖堂で、ランスは歴代のフランス王の戴冠式を行なう場所となった。

なおランスは、パリの北東約170[150]キロにある。ランスのノートル=ダム大聖堂は、1210年に炎上し、その一年後に建築家ジャン・ドルベにより再建された[始められた]。身廊の天井の高さ37.95メートル、内部の全長138.9メートルである。

817年7月、ロータルI世は、共治帝となった。

「皇帝は817年聖木曜日、事故に遭い、この世のはかなさを思い知らされた。側近の勧めもあって、同年7月『帝国継承令 Ordnavio imperii』が發布され、帝国の三分割が決定された。すなわち、長男ロータルが共同統治皇帝に選ばれ、戴冠された。」<sup>43)</sup>

「教皇が816年10月5日にランスのマリア教会で執り行ったルイ敬虔帝の戴冠式と塗油式は明らかに『祭礼戴冠』にすぎず、皇帝権の法的根拠となるような行為とは考えられていなかった。ルイはその一年後に早くもカー大帝の先例にならい、長子ロータルを再びアーヘンで自らの手で皇帝に戴冠したのである。」<sup>44)</sup>

「しかしまたもや教皇は、それも今回はローマにおいて、戴冠式の再挙行に成功した。教皇の懇願により、ロータルはローマへ赴き、823年の復活祭にサン・ピエトロ大聖堂においてパスカリス一世の手から戴冠された。」<sup>45)</sup>

823年4月5日、ロータルI世は、教皇により皇帝(Kaiser)となった。

こうして「823年から、皇帝はローマで教皇から戴冠をうける。ただし、これもカロリング家にとっては皇帝の相続を補充ないし確認する程度の意味しか持たなかった。」<sup>46)</sup>

840年6月20日、皇帝ルートヴィヒ[ルイ]II世敬虔帝が亡くなる。

「皇帝ロータルは、長子男ルートヴィヒ二世を共治皇帝にしたが、自分自身で皇帝に戴冠するのは断念し、戴冠式のために息子をローマに送った。ローマ教皇レオ四世(在位847~855年)は彼を皇帝として塗油し、おそらく戴冠式も執り行った。こうして皇帝権は最終的に永遠の都にもどったのである。」<sup>47)</sup>

850年4月、ルートヴィヒ[ルイ]III世は、教皇により皇帝(Kaiser)となった。

「これ以後、皇帝の聖別行為は皇帝昇格の不可欠の要素と見なされることになった。」<sup>48)</sup>

敬虔帝の長子「ロータルは、彼の先任者とは異なって、なんら独自の戴冠式を挙げなかったため、ローマでの戴冠が特別な作用をもつにいたった。ニコラウス1世は、すでに、その中に決定的な法的要素を見出している。ルートヴィヒは、871年、ギリシア人との論争において、ロー

マに対する彼の支配と教皇による聖別を引き合いに出しているのである。かくして、教皇による皇帝戴冠は、西欧における皇帝登位の基本要素となり、それは、もちろん、ロータル系の断絶後、はじめて歴史的に効果を発揮することになるのである。」<sup>49)</sup>

「9世紀後半には、皇帝の塗油儀式が、法王による戴冠式の最重要手続きとされるにいたり、皇帝の戴冠式は法王の権限に帰したのである。

とはいえ、皇帝は法王の上にあるという東ローマ的皇帝観はなお存続し、962年のオットー大帝によるローマ帝国(いわゆる神聖ローマ帝国)復興に際し、またしても力強く復活される。それが最終的に否定されたのは、11世紀後半におこったグレゴリウス改革と、その結果たたかわれた司教職叙任権闘争による。」<sup>50)</sup>

855年9月29日第3代皇帝ロータルI世が亡くなる。

875年8月12日第4代皇帝ルートヴィヒ[ルイ]III世が亡くなる。

#### 4.2. 以後の皇帝即位。

第5代皇帝となる「シャルルは9月29日、バヴィアに現れ、一部のイタリア豪族から中世の表明を受け、ローマへ入って、そこでヨハネス八世によって、875年クリスマス、皇帝に戴冠された。」<sup>51)</sup>

875年12月25日、カールII世は、教皇により皇帝(Kaiser)となった。

877年10月6日、皇帝カールII世が亡くなる。

第6代皇帝となるカールについては、「ようやく880年1月、三男カール三世・肥満王がバヴィアに現れ、ラヴェンナで教皇に会見した。一部のイタリア豪族から中世の表明を受け、ローマへ入って、そこでヨハネス八世によって、875年クリスマス、皇帝に戴冠された。」<sup>52)</sup>

881年2月12日、カールIII世は、教皇により皇帝(Kaiser)となった。

888年1月13日、皇帝カールIII世が亡くなる。

#### 注

- 1) 『世界各国史 15 イタリア史』147頁。
- 2) 塩野七海『ローマ亡きあとの地中海世界1』新潮文庫 2014年 66-67頁。
- 3) 『新訂 世界歴代王朝王名総覧』140頁参照。
- 4) ウィルスン『神聖ローマ帝国 1495-1806』28頁。
- 5) 『図説 指輪の文化史』67頁。
- 6) 『中世の「ドイツ」』179頁。
- 7) 『中世の光と影(上)』148-149頁。
- 8) 『ドイツの歴史を知るための50章』86頁。
- 9) 『西欧中世史事典II』112頁。
- 10) 『西欧中世史事典III』85頁。
- 11) 『西欧中世史事典III』86頁。
- 12) 『西欧中世史事典II』111頁。
- 13) 『西欧中世史事典II』112頁。

- 14) 『中世の人間』 397 頁。
- 15) 『あだ名で読む中世史』 204-205 頁。
- 16) 『聖王ルイ』 42 頁。
- 17) 『新訂 世界歴代王朝王名総覧』 112 頁参照。
- 18) 『世界史の流れ』 81 頁)。
- 19) 『シャルルマーニュの戴冠』 202 頁。
- 20) 『世界歴史大系ドイツ史 1』 135 頁。
- 21) 『物語 ドイツの歴史』 66 頁。
- 22) 『西欧中世史事典 II』 37 頁。
- 23) 『西欧中世史事典 II』 31 頁。
- 24) 『紀元千年の皇帝』 164 頁。
- 25) 『西欧中世史事典 II』 33 頁。
- 26) 『西欧中世史事典 II』 35 頁。
- 27) 『西欧中世史事典 II』 36 頁。
- 28) 『西欧中世史事典 II』 36 頁。
- 29) カール大帝は、「801 年 4 月 4 日の復活祭をローマで祝い、その三週間後に帰国の途につき、スポレートに向かった。それから数日してローマは大地震にみまわれ、ローマの聖ペテロ大聖堂の屋根瓦の大部分が崩落する大きな被害をこうむった。」(『カール大帝』 84 頁。)

サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ聖堂について「コロッセオから南東に 1 キロメートルほど離れたところに、ラテラヌス家の邸宅があった。ラテラヌス家ははコンスル(執政官)を排出するような名家だったが、ネロ帝のときに謀反の疑いをかけられ、邸宅は没収された。…コンスタンティヌス帝はそれをローマのキリスト教会(つまり教会組織)と、その代表であるローマ司教に与えた。邸宅は司教館となり、敷地内のバシリカが聖堂となった。司教座が置かれたから、そこはローマ大聖堂と言える。…10 世紀に洗礼者ヨハネに再献堂された。現在、イタリア語で『サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ聖堂(ラテラヌスの聖ヨハネ聖堂)』と呼ばれるのはそのためである。」(浅野和生『図説中世ヨーロッパの美術』河出書房新社 2018 年 11 頁)

「その後グレゴリウス 11 世が厳かにローマに入城し、ヴァチカンに居を定めたのは、ようやく 1377 年 1 月のことであった。教皇がヴァチカンを選んだのは、ラテランの聖堂と宮殿が 1308 年と 1361 年の二度の火災で被害を受け、荒れ果てていたからである。」(『サン・ピエトロ大聖堂』 47 頁)

「たとえばカトリック教会の『カトリック大阪大司教区』は、大阪府、兵庫県、和歌山県を受け持ち範囲としている。キリスト教徒の多いヨーロッパでは、司教区の範囲は地理的にもっと狭くなる。

その司教区を統括する聖職者を、司教(主教)とよぶ。司教の座る椅子である司教座(cathedra)が置かれてた聖堂が大聖堂(cathedral)である。」(浅野和生『図説中世ヨーロッパの美術』 26 頁)

- 30) 『西欧中世史事典 III』 10 頁。
- 31) 『中世の人間』 374 頁。
- 32) 『中世西洋文明』 426-427 頁。
- 33) 『紀元千年の皇帝』 98 頁。

なお以下の聖聖式の定義もある。「国王の塗油は西ゴート王国ではじめて導入され、フランク王国において伝統となった。戴冠式とその前の聖別式、両方合わせて『成聖式』(sacre)と呼ぶこともある。」(『儀礼と象徴の中世』 28 頁)

- 34) 以下の意見もある。

『『ロルシュ年代記』の『教皇レオ猊下の聖別(consecratio)により、皇帝の名を得た』(『王国・教会・帝国』 275 頁)

「聖堂にどうローマ市民の『歓呼』の声につづいて、教皇による加冠と塗油が行われる。」(『西欧中世史[上]』 107 頁)

- 35) 『西欧中世史事典 III』 75 頁。
- 36) 『シャルルマーニュの戴冠』 144-45 頁。
- 37) 『王国・教会・帝国』 276 頁。
- 38) 『西欧中世史事典 II』 125 頁)

なお「王冠と戴冠は、メロヴィング王についてその他に証明されない。ピピンもまた 751 年国王に選ばれたとき、戴冠しなかった。カール大帝の時代に初めて国王戴冠が確かに証明される。この支配者は、781 年ローマで二人の息子ピピンとルイを教皇ハドリアヌスによって塗油させ、ピピンをイタリア王(rex Lombardorum)に、ルイをアキタニア王(rex Aquitanorum)に戴冠させた。カール大帝は、皇帝戴冠に続いて長男カールをもレオ三世によって国王に塗油と戴冠させた。これにより戴冠は、フランク王国とその継承国家において国王推戴の確固たる要素となった。」(『西欧中世史事典 III』 81-82 頁)

- 39) 『西欧中世史事典 III』 73 頁。
- 40) 『図説中世の光と影 上』 20 頁。
- 41) 『西欧中世史事典 II』 141 頁。
- 42) 『ドイツ中世前期の歴史像』 40 頁。
- 43) 『ドイツ中世前期の歴史像』 40 頁。

なお「ピピンの孫でカロリング朝三代目のルイ敬虔帝(在位 814~840)がランスで即位式をおこなったとき、はじめて塗油と戴冠を結びつけた。」(『フランス史 10 講』 20 頁。)

- 44) 『西欧中世史事典 II』 142 頁。
- 45) 『西欧中世史事典 II』 233 頁。
- 46) 『西欧中世史[上]』 39 頁。
- 47) 『西欧中世史事典 II』 142 頁。
- 48) 『西欧中世史事典 II』 233 頁。

以下の意見もある。『『成聖式』が成立したのは、カールの子、ルイ敬虔帝が 816 年にランスで、教皇ステファヌス四世から戴冠と同時に塗油による聖別を受けたときからである。』(『儀礼と象徴の中世』

30 頁)

いずれにせよ、結果として「九世紀の過程で、教皇たちは、ローマにおいて教皇によって皇帝の戴冠が行われていることが、皇帝となるために不可欠の要件だとする考えを広めるのに成功した。」(『儀礼と象徴の中世』29 頁)

49) 『カロリング帝国とキリスト教会』181 頁。

50) 『中世の光と影(上)』155 頁。

51) 『ドイツ中世前期の歴史像』52 頁。

52) 『ドイツ中世前期の歴史像』55 頁。

## 文 献

### ◆系譜

ジョン E・モービー(堀田郷弘訳)『新訂 世界歴代王朝 王名総覧』東洋書林 1998

ジョン E・モービー(堀田郷弘訳)『世界歴代 統治者名辞典』東洋書林 2001

### ◆皇帝・帝国

ピーター H. ウィルソン(山本文彦訳)『神聖ローマ帝国 1495-1806』岩波書店 2005

菊池良生『神聖ローマ帝国』講談社現代新書 1673 2003

渡辺鴻『[図説] 神聖ローマ帝国の宝冠』八坂書房 2008

### ◇カール大帝

ロベール・フォルツ(大島誠編訳)『シャルルマーニュの戴冠』白水社 1986

五十嵐修『地上の夢 キリスト教帝国』講談社選書メチエ 224, 2001

五十嵐修『王国・教会・帝国』和泉書館 2010

佐藤彰一『カール大帝』世界史リブレット人 29 山川出版社 2013

### ◇オットー朝

佐川亮宏『紀元千年の皇帝』刀水歴史全書 95 2018

### ◇シュタウフェン朝

エルンスト・H・カントローヴィチ(小林公訳)『皇帝フリードリヒ二世』中央公論新社 2011

フリードリヒ・フォン・マウラー(柳井尚子訳)『騎士の時代』法政大学出版局 1992

### ◆中世ヨーロッパ史

フェルデナント・ザイプト(永野/井本/今田訳)『図説 中世の光と影 上』原書房 1996

レーオポルト・フォン・ランケ(岡村哲訳)『世界史の流れ』ちくま学芸文庫 1998

ハンス・K・シュルツェ(五十嵐/浅野/小倉/佐久間訳)『西欧中世史事典 II』ミネルヴァ書房 2005

ハンス・K・シュルツェ(小倉/河野訳)『西欧中世史事典 III』ミネルヴァ書房 2013

ジャック・ル=ゴフ(渡辺香根夫訳)『中世の人間』法政大学出版局 2009(1999)

ジャック・ル=ゴフ(岡崎/森本/堀田訳)『聖王ルイ』新

### 評論 2001

ジャック・ル・ゴフ(桐村泰次訳)『中世西欧文明』論創社 2014(2007)

オイゲン・エーヴィヒ(瀬原義生訳)『カロリング帝国とキリスト教会』文理閣 2017

池上俊一『儀礼と象徴の中世』岩波書店 2008

江川/服部良久編著『西欧中世史[中]』ミネルヴァ書房 西洋史ライブラリー 11, 1995

岡地稔『あだ名で読む中世史』八坂書房 2018

佐藤彰一/早川良弥編著『西欧中世史[上]』ミネルヴァ書房 西洋史ライブラリー 10, 1995

今野國雄『西洋中世世界の発展』岩波全書セレクション 2005

浜本隆志『図説 指輪の文化史』河出書房新社 2018

堀越/甚野編著『15 のテーマで学ぶ中近世ヨーロッパ史』ミネルヴァ書房 2013

堀米庸三『中世の光と影(上)』講談社学術文庫 205 2006 (1978)

### ◆ドイツ史

アンドレ・モロワ(桐村泰次訳)『ドイツ史』論創社 2013

マンフレッド・マイ(小杉尅次訳)『50 のドラマで知るドイツの歴史』ミネルヴァ書房 2013

ハンス・フリードリヒ/ヘルムート・ローゼンフェルト(鎌野多美子訳)『中世後期のドイツ文化』三修社 1999

ハインツ・トーマス(三佐田/山田編訳)『中世の「ドイツ」』創文社 2005

阿部謹也『物語 ドイツの歴史』中公新書 1420 1998

魚住昌良『ドイツの古都と古城』山川出版社 1991

魚住昌良『世界歴史の旅 ドイツ』山川出版社 2002

木村靖二編『ドイツの歴史』有斐閣アルマ 2000

木村靖二編『世界各国史 1 3 ドイツ史』山川出版社 2001

成瀬/山田/木村編『世界歴史体系 ドイツ史 1』山川出版社 1997

坂井榮八郎『ヒストリカル・ガイド ドイツ・オーストリア』山川出版社 1999

坂井榮八郎『ドイツ史 1 0 講』岩波新書 826 2003

坂井榮八郎『ドイツの歴史百話』刀水歴史全書 84 2012

瀬原義生『ドイツ中世前期の歴史像』文理閣 2012

瀬原義生『ドイツ中世後期の歴史像』文理閣 2012

森井裕一(編集)『ドイツの歴史を知るための 50 章』明石書店 2016

### ◆その他

石鍋真澄『サン・ピエトロ大聖堂』吉川弘文館 2000

北原敦編『世界各国史 1 5 イタリア史』山川出版社 2008